

## ●京都・伏見にルーツ

「お父さんとお母さんとどっちが好き？」と問われた子供が、まんじゅうを二つに割って「どっちがおいしい？」と問い返したという逸話がある。自分の気持ちを直接言わずに、相手に悟らせる賢い子供。そんな逸話を形にしたのが佐土原町に伝わる「まんじゅう喰い人形」である。佐土原土人形を代表するスターであるが、そのルーツは京都・伏見の「まんじゅう喰い人形」にあるという。

佐土原藩は、慶長八（一六〇三）年の初代島津以久（ゆきひさ）以来、廃藩置県（一八六九・明治二年）の時の十代忠寛まで二百六十六年間、三万石の外様大名として続いた。その初代以久は京都に居るとき、京都大雲院の門に入り、伏見の藩邸は参勤交代や大雲院、伏見稲荷参拝の重要な拠点となった。特に、稲荷神社は島津氏の氏神で、そうした縁が伏見の縁起人形

である「まんじゅう喰い」を佐土原に伝えたとみられる。

佐土原城二の丸跡に一九九三（平成五）年に復元された鶴松館（山城の鶴松之城から命名）がある「佐土原城跡歴史資料館」に多くの佐土原人形が勢ぞろいしている。その大部分は、古い窯の研究に熱意を示した延岡市の医師・故小田省三氏が「自分の研究は終わった。人形は故郷佐土原に帰してあげよう」と寄贈したものだ。その中で多いのが「歌舞伎人形」である。

佐土原では廃藩置県の直前に全国でも珍しい城移しを行い、佐土原城下の武士のほとんどは今の広瀬に移った。城のあった上田島にはそれまで武士の支配下にあった商人が残り、そこに明治時代、商人文化が開花する。

飢肥・薩摩、米良街道・高鍋往還と日向の主要な道路が交わる佐土原は商取引の場となり、

憩い、飲菜の色を濃くしていった。江戸時代には表に出ることの少なかった歌舞伎が盛んになり、「佐土原座」という一座ができるほどで、弁当持参の人々にぎわったという。

その演技の名場面が「仮名手本忠臣蔵」「義経千本桜」などの歌舞伎人形となり、人々に買い求められた。寛政八（一七九六）年の布袋人形が最も古いが、完成度の高さからみて、それ以前から作られていた一面も残している。

歴史の証人でもある歌舞伎人形。その目線をたどると、人形師の心意気が伝わってくる。佐土原に人形屋は一時期、十四、五軒もあったが、今は「ますや」「陶月」が伝統を受け継ぐだけになった。

赤木達也



佐土原人形。町民文化の伝統を引き継ぐ